

昭和の南海地震体験談

氏名:辻 登(つじ のぼる)

生年月日:昭和3年7月14日

地震を体験した場所:海南市鳥居・自宅寝室

当時の家族状況:父、母、姉



1) 地震発生時の状況

当時18歳で2階建て自宅の2階寝室に姉と就寝中、強い揺れを感じ目が覚めた。立ち上がることができない程の揺れが2回あり、2回目の方が大きかった。恐怖心が勝り、どうすることもできず、物が落ちてくるかもしれないので、布団を被って揺れが収まるのを待った。バラバラバラッと家の崩れる音、ダダダァーッと瓦の落ちる音、その音にも、もの凄い恐怖を感じた。揺れが収まった後、枕元の着替えを小脇に抱え、姉と2人で1階に降り、外へ飛び出した。家は倒れないで、歪んだまま持ちこたえていた。

2) 津波襲来時の状況

近くの広場に人が集まり焚き火をしていた。あちこちから人が寄って来て、焚き火にあたりながら地震について話をしていると、誰かは不明だが古老の方が「この地震、ひよっとしたら津波けえへんか(来るのではないか)?」と言い出したので、近くの川を見ると、潮が全部引いてしまっていた。冷水まで歩いて渡れる程だった。津波は来る前に一旦潮が引いてしまうが、当時は津波の知識が無く、「潮も無いのに、津波ら来るかよ」と誰も信じず、暫く焚き火にあたって、人々もぼちぼち帰り始めた時、「ゴォーッ」という、もの凄い地鳴りの音がした。浜の方から大人の男性が「津波やぞー！逃げよよー！」と走ってきた。逃げなければと東に向かって一生懸命走ったが、潮の方が速く、途中で追いつかれ、腰まで水に浸かってしまった。ちょうど登り坂で勢いが減少したこともあり、なんとか内海小学校グラウンドまで避難できた。

3) 家族の行動・被害

家族は全員無事で、一緒にいることができた。避難してから1時間程して自宅に戻ると、水は引いていたが、衣類も布団も浸かって何もかもない、家の中は無茶苦茶で、2階だけがかるうじて助かった。1階天井下30cmの所まで浸水した跡が残っていた。家業は和傘製造業であったが、完成品と製造途中の品のあわせて2700本、全部が流失した。

4) 集落・周囲の被害

30世帯程の町内で6名の方が亡くなった。4名の遺体は潮が引いた後に見つかり、2名は行方不明だった。ご夫婦のおじいさんとおばあさんが着物を抱えたまま亡くなっていた。逃げ

遅れたのだろう。3歳の女の子は行方不明になり、ずっと捜索していたが、縁の下で土まみれになって亡くなっていた。仏教の言葉で「阿鼻叫喚」、まさに地獄絵のようだった。

あちこちの隅に、沖に生息している大きな魚(ボラ、スズキ、チヌ)がバタバタ跳ねていた。被災地以外の地区の人が、魚や布団、着物を拾いに来ていた。情けなく、悔しく思う一方、物資の乏しい戦後の状況を思うと、その人達を憎めなかった。

5) 地震・津波後の生活

近くの山手にあった父の友人宅に3ヶ月間、家族4人でお世話になった。家族全員で涙をポロポロこぼしながら、自宅の片付けや修理にかかった。石油会社の油でグズグズになり、使えなくなった物を外に出して、積んで、燃やした。食料や衣類は被災しなかった親戚や友人達から頂いた。地震の翌年の春に、父の事業の工場の建て直し工事が始まった。

6) 次の災害への備え

自宅を耐震仕様に改修した。タンスや食器棚が転倒しないように、壁や天井に固定した。柱に留めているので、倒れなければ家具が支えになって助けてくれる。家族で避難場所を決め、各自非常持ち出し袋を作っている。家族の中で防災の意識を統一しておくべきだ。家でも町内でも、まっすぐ広い高速を目指して走りなさい、と言っている。建物付近でウロウロしない、建物の中にいない、ということは学校、一般、家庭で教えていくことが大事。

年に1回は防災訓練を行っている。日頃の訓練、鍛錬をすることで恐怖感を越えられる。

